



写真提供：岐阜新聞社

帝京高校を破り、準決勝進出を決めた県岐阜

# 県岐阜野球部45年ぶりの準決勝進出

第91回全国高校野球選手権大会で、県立岐阜商業高校は第46回大会以来45年ぶりの準決勝進出を果たしました。

県岐阜野球部出身で現在、パナソニック株式会社常務役員の鍛冶舎巧氏に、ご自身の野球人生と今大会の後輩達の戦い振りについてお話しを伺いました。

## ● 鍛冶舎氏の県岐阜野球部時代

鍛冶舎氏の野球との出会いは小学生時代でした。中地球場の巨人戦で、長嶋茂雄選手のプレーを間近に観たことがきっかけでした。中学校に進み野球部に入った鍛冶舎氏はすぐに頭角を現し、ピッチャーで4番、そして、3年生の時にはキャプテンも務めています。県岐阜でもやはり野球部に入り、1年生の時からベンチに入り、3年生の春の選抜大会で甲子園出場を果たし、ピッチャーとしてベスト8まで進みました。

鍛冶舎氏は当時の県岐阜野球部の練習について、「とにかく、厳しくて辛かった」と述懐しています。定時制がありグラウンドに照明があったため日が暮れても練習、練習でした。「極限まで自分を試していった、どこまで我慢できるかという練習でした。しかし、そういうことを経験している人間は強いですね」と確信を持って語ります。

野球部には合計100人ほどの入部者が集まったものの、厳しい練習についていけず、3年生になった時には16人になっていました。今は、0.1トンほどの体重の鍛冶舎氏も、当時は65kgのスマートボーイでした。

## ● 今大会を振り返って

鍛冶舎氏は、今年の全国高校野球大会での県岐阜の後輩達の活躍を振り返って、「今大会では一回戦の山梨学院大付属高校との戦いがすべてだった」と語り、勝因として三点を挙げました。一点目は「藤田監督という将を得たこと」を挙げました。藤田監督は選手の近くで練習を見て、直接選手と言葉を交わし、一人ひとりの選手の個性や特性を的確に把握し、試合においては臨機応変に大胆に選手を起用していき見事にその作戦が的中しました。二点目は試合で「流れをつくる」ことの重要性を挙げました。初戦の山梨学院大付属高校との試合で初回に7点を奪ったダブルスチール、ツーランスクイズ、ヒットディング、ホームランと硬軟取り混ぜた攻撃は見事でした。三点目は「選手を乗せることができた」と述べました。強気、強気の作戦と、盗塁なども「行けたら、行け」というサインで、選手に主体性を持たせ、選手を乗せることに成功しました。さらに「守備が素晴らしかった。それに攻撃の積極性が加わり、うまくかみ合った良いチームとの印象を受けた」と話しました。



